

自己学習力の育成

家庭学習で育てるもの

大阪市立大学准教授 添田晴雄 そえだ はるお

生涯学習社会における自己学習力

日本の学校の教師は優秀であり親切である。子どもが学校にいるあいだ、手取り足取り教えようとしてしまう。しかし、それでは子どもは学校を卒業して教師の手から離れたとたんに学ぶことをやめてしまう。教師のほんとうの役割は、卒業後も子どもが自律して学び続けることができる自己学習力を育むことである。社会の在り方や科学技術が著しく激変し、学校で学んだ内容が短期間で陳腐化してしまう現在において、生涯にわたって学び続けることができる自己学習力は、個人にとっても社会にとっても必要不可欠なものになっている。

自己学習力には、(1)学ぶ意欲、(2)学ぶ方法、(3)学ぶ基盤、(4)自己評価の四つの側面がある。

(1) 学ぶ意欲

学びは本来自発的な活動であるが、だれもがいつでも自然発生的に学び始めたり、その学びを継続させたりするわけではない。人が生涯にわたって学び続けるためには、学ぶ意欲がしつかりとしてい

なければならぬ。

学ぶ意欲の根本は、学習者自身が、学ぶことはおもしろいのだ、楽しいことなのだ、ということを実感として知っていることである。学校時代の学びの成功体験として、たとえば、五七五の日本語のリズムのおもしろさがわかった！ アリが社会を形成して生きている様子を知って感動した！ ゴツホの作品からエネルギーが出ていたのを感じた！ 間伐材で作った割り箸を使うことが環境保全につながることを知って目から鱗がおちた！ などを経験した人は、卒業後も自ら学んでみようという気持ちになる。

また、教科などの学習で身につけた知識や技能を生活の場面で活用できたという経験の積み重ねも大切である。九九を使つてかけ算をしたらコンビニでの買い物合計金額が計算できた！ 野球の対戦相手の投手の投球データをヒストグラムで整理してそれに基づいて練習をしたら試合に勝てた！ 現在完了進行形を使つたら継続のニュアンスがうまく伝わった！ などである。

学んだことを活用できたという体験の蓄積は、学ぶ意義への信頼を厚くする。学ぶ意義を理解していれば、学ぶ過程に多少の困難が伴つたとしても困難を乗り越えて学びを続けようという意欲につながる。また、生活の場面で直面した課題を教科で得た知識や技能で解決しようとする。

学校時代における、こういった学びの成功体験の蓄積が、生涯にわたつて学び続ける意欲につながるのである。

(2) 学ぶ方法

社会における学びは探究過程を通して行われる。課題を特定したり絞り込んだりする、必要な情報を、文献やインターネットで集めたり、学校外の人にインタビューをしたり、見学・観察・観測をし

て記録したりする、集めた情報を取捨選択する、同僚たちと意見交換をする、発見したことや考えたことをまとめる、探究の成果を口頭発表やレポート形式で発信するなどである。これらは、「総合的な学習の時間」で重点的に訓練されるが、このような学び方は、教科の学習の中でも指導されるべきである。

こういった学びは、同僚ないしは級友との人間関係の中で行われる。また、地域学習の場合は、地域の人々とも人間関係を構築することによって初めて実現できる。この意味で、望ましい人間関係を形成していく力も、広義の学び方とらえ、自己学習力の大きな柱と考えることができる。

(3) 学ぶ基盤

探究活動を行うためには、基盤としてしっかりとした読み書き能力や計算能力が必要である。また、考えたり判断したりするためには、教科で学ぶ知識や技能も不可欠である。

生涯にわたって学び続ける基盤としての知識、技能は広範にわたり、莫大な量となる。それゆえ、学校教育の多くの時間をこの基盤部分の学習に充てざるを得ない。また、学び方としても、時にはドリル学習や教科書に沿って系統立てて能率よく学んでいくことも大切である。探究による学びだけが学びではない。生涯学習社会においては、詰め込み的な学びの方法も必要な場面が出てくる。しかし、基盤だけでは変化の激しい社会を生き抜くことはできない。基盤とそれに支えられた探究的な学びの両方が必要なのである。

(4) 自己評価

学校の中では、教師が学習目標を設定し、学習計画を立て、時間管理を含めた学習活動の管理をし、学習途上や学習後に目標に準拠した評価を行い、その評価に応じて学習計画を変更したり、次の学習

目標を設定したりする。そして、こういった教師の評価サイクルによって、子どもの学習が充実していく。しかし、この評価サイクルを子ども自身が自分でできるようにして卒業させないと、自分の学習を自分でマネジメントしていくことができない。

自分の学びを自己評価する力を育成するためには、まず、教師が評価サイクルを実行して子どもに見本を示すことから始める。そして、子どもにもその評価過程に徐々に参加させていくことになる。

同時に、メタ認知の訓練も必要である。学習活動を認知活動とすると、自分の認知活動を、より高い次元（メタ）から、あたかももう一人の自分がいるかのように、認知的に監視し、管理していくことがメタ認知となる。メタ認知は一足飛びに獲得されるものではなく、たとえば学級の友だちに対する他者評価の訓練と、教師が子ども自身に対して行っている評価活動の内在化のための訓練を経て、徐々に身につけていく。

家庭学習の役割

自己学習力。これを育成するのは学校の責務である。しかし、家庭での生活、活動、学習に工夫があれば、子どもの自己学習力はさらに大きく伸びることになる。また、学習には、家庭であればこそ効果があがるもの、むしろ、学校に任せておく方が適切なものなどがある。以下ではこのような観点に立ち、前述の自己学習力の四側面に即しながら、家庭学習の在り方について述べることにする。

(1) 学ぶ意欲　子どもが赤ちゃんの頃、初めて立つことできたとき、初めて言葉をしゃべったとき、親は全身でわが子の成長を喜び、さらなる成長を励ます。子どもは幼児期からのこのような経験

の延長線上に、学ぶ意欲をもつようになる。これは家庭でだからこそできる経験である。子どもが小学生や中学生になっても、たとえば、図書館や博物館や美術館や名所旧跡を子どもと共に訪れ、子どもが見つけたこと、感じたことを家庭で話し合う。あるいは、自転車に乗れた、サッカーの試合で素晴らしいパスをした、という子どもの成長をたたえ、家族の話題とする。これらの蓄積が学ぶ意欲になる。

また、教科で身につけた知識や技能を活用する場としても家庭は宝の山である。数を習えば、家じゅうのものを数えさせる。九九を習えば買ひ物に活用させる。長さ、容積、重さ、温度、時間などは、はかる対象が無限に家庭内に存在するので、親子でクイズを出して正解をはかったり、気温や雨量などを定期的に記録したりする。学校でリサイクルを学べば、家庭で何ができるかを話し合い、家族でできることから始める。さらに、家庭での生活の中で、子どもが言葉や動物や乗り物に興味を持てば、それらを学校で使っている辞書や教科書で調べさせたり、図鑑を見るように促したりする。

こういったことが、学校での学習とつながり、学ぶ意欲を強固なものにしていく。

(2) 学ぶ方法 理想論を言えば、保護者自身が自分の課題について探究活動を行い、その姿を子どもに見せるのがよい。しかし、それができなくてもよい。学校の教師の指導のもとでこそ伸びる力であるからである。保護者は、学校が探究の学習を重視していることに理解を示し、この方面での子どもの成長に気づけば褒める。それでいい。

なお、探究学習では、校外の大人に出会う機会が多い。日頃から、子どもを親戚の人や地域の人といった多様な大人たちと日常的に会わせることによって、あいさつや会話ができるようになっておくことは、学校よりも家庭の役割であろう。

(3) 学ぶ基盤 教科の指導も学校が主にインシアティブをとるべきである。教師は、宿題の形で家庭学習の協力を求めることが多い。宿題のやらせ方については、本号の別章に論考があるのでそれに譲るが、一般論で言えば、宿題をしなさいと口で言うよりも宿題に集中できる環境作りの方が効果的であるようである。また、家庭での宿題の意義は、学習習慣の習得、知識や技能の習熟・定着化、学校での学習の一端を家族の者が知る機会となる、の三点であると考える。その意義を念頭に置いて家庭学習を見守ることが大切である。

(4) 自己評価 評価サイクルの指導は家庭では難しい。しかし、メタ認知の訓練は家庭で十分に行える。学校で起こったこと、子どもがしたこと、感じたこと、考えたことを家庭で子どもに日常的に話させるのである。特別な道具は必要ない。子どもに質問し、子どもの話を共感的に聞けばよいのである。子どもに学校のことを聞いても、「別に」という返事で終わってしまうことがあるかもしれない。その場合でも毎日聞き続けることが大切であり、また、学校での学習や各種活動の様子を、担任教師との会話、学級通信、子どもの書く班ノート、教科書や教科ノート等を手がかりにして情報収集をしたり、場合によっては家族が学校の行事やボランティア等に参加して学校での活動に直接触れたりすることにより、家族の方から話題をふって会話を促すなども重要である。振り返りの習慣が身につくについていけば、学校におけるメタ認知や自己評価サイクルの指導が促進される。

*

*

このように検討してきて言えることは、自己学習力を育成する家庭学習の在り方とは、家庭が本来あるべき環境を整えることであり、家庭と学校の連絡を密にすることであり、なによりも、家族が子どもと頻繁に対話することが大切である、ということである。

児童心理

2013年2月号

臨時増刊 No.963

家庭学習を問い直す

活用・探究型学力を
家庭学習でどう育てるか

学習障害のある子の家庭学習サポート

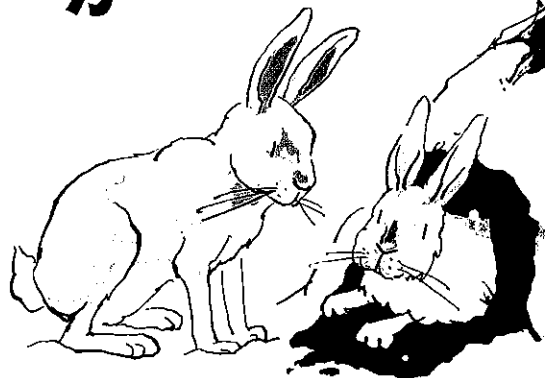
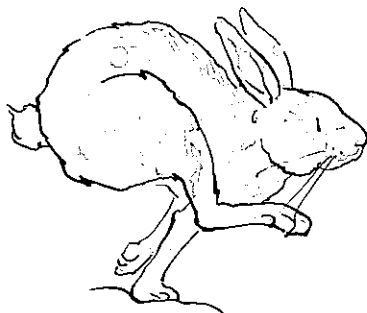
なぜ、家庭学習が 大切なのか

不得意科目のある子の家庭学習

国語／算数／社会／理科／体育

発達段階と家庭学習のポイント

保護者の悩みに答える——家庭学習のアドバイス



お茶の水女子大学グローバルCOEプログラム
格差センシティブな人間発達科学の創成

全4巻

人間発達の時間軸を貫く格差の次元を、国際的格差、教育・社会的格差、
教育環境格差の領域に設定し、格差が各領域で再生産されるしくみを
解明するとともに是正のための方策を提言!



1 巻

子ども期の養育環境とQOL

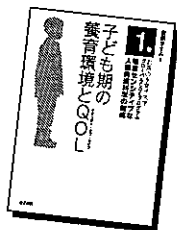
クオリティ・オブ・ライフ

菅原ますみ 編

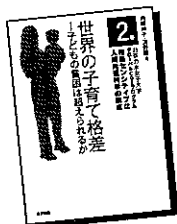
A5判・184頁 定価2,520円(税込)

子どもの幸せを
保障するのに必要なこととは?

世帯収入、親の養育態度、メディアへのかかわり方、発達障害との関連、地域の保健サービスのあり方などは、子どもの発達や健康にどのように影響を及ぼしているのでしょうか。子ども自身の幸せを客観的に調べることから、格差社会の現代における子育ての課題と支援の方向をさぐります。



ISBN978-4-7608-9534-2



ISBN978-4-7608-9535-9

世界の子育て格差
—子どもの貧困は超えられるか

内田伸子・浜野 隆 編

A5判・176頁 定価2,520円(税込)

日本・中国・韓国といった東アジア諸国から、ベトナム・モンゴル・スリランカ・ネパール・ガーナなどの途上国まで、多様な国の子育て事情や発達をめぐる調査結果を報告します。幼児期の親のかかわりと学力の関連、母子保健医療、バイリンガル教育など具体的で切実なテーマを収載しました。

2 巻



貧困の中の子どもの育ちはどう支援できるか

以下、続刊予定

3 巻 学力格差に挑む

耳塚寛明 編

4 巻 格差を超え公正な社会へ

平岡公一・三輪建二・米田俊彦 編

〒112-0012 東京都文京区大塚3-3-7

K 金子書房

☎03(3941)0111(代) FAX03(3941)0163
URL <http://www.kanekoshobo.co.jp>

雑誌05144-2

©-2013/3/11

Printed in Japan



4910051440235
01200